

實踐佛教に於ける高祖の地位

森 本 眞 順

序 説

昭和新時代に於ける一般教學界内に於て注意すべき事は實踐的論書の續々出現せし現象である。村上博士宇井博士紀平博士和辻學士等のものは其の最なるものであらう。此等の諸學者に抱懷せられたる實踐

的思想がやがて一般民衆に具體化せられ要請せらるべき時代の前兆と見て差支ない。此の意味に於て昭和聖代は新しき佛教の實踐時代であるべきである。

此の秋に當り高祖善導の遠忌辰を迎へんとする吾等淨土教徒は稀世曠界の活きた大實踐道を一般民衆に宣傳し弘敷し一方高祖の精神に還りて現代社會を觀じ、他方新しき時代に要請せらるべき又必要缺くべからざる實踐佛教の先驅として高祖の芳躅を讃仰隨喜して高祖報恩の一端とし且つ現代世相に於ける矛盾

盾缺管の幾多を矯正し以て宗教の至極道たる實踐的價値を發揮せんとす。以下高祖に關する吾人の痛感せし事共を取とめなく列ね以つていさゝか所感の一端を披瀝しやう。

高祖の行狀

高祖平生の行狀は如法峻嚴にして自持謙遜にして能化としての稀なる道固者たりし事明なり。高祖の諸傳を拜讀する度に何時も深い感激を引發せしめられるのである。後章の參考の爲め且つ高祖の聖躅を仰讃せんが爲めには諸傳を精讀する事の肝要なる故に繁を煩はず、二三抄出引用せん。

禪師平生常樂^ニ乞食^ニ。每自責曰尺^ニ迦^ニ尚^ニ分衛^ニ。善導何人。端居索^ニ供養^ニ乃^ニ至^ニ沙彌^ニ竝^ニ不^レ受^レ禮^ニ云々

(隨應傳—唐文詮少康)

導入レ堂則合掌胡座一心念佛。非力レ竭不レ休。乃至寒冷亦須レ流汗。以此相狀。表ニ於至誠。出即爲レ人說ニ淨土法。化ニ諸道俗。令下發ニ道心。修淨土行。無レ有ニ暫時不レ爲ニ利益。三十餘年無ニ別寢所。不ニ暫睡眠。除ニ洗浴。外會不レ脱。衣服舟行道禮佛方等以爲ニ己任。護持戒品。纖毫不レ犯。不ニ會舉レ目視ニ女人。一切名利無ニ心起。念綺詞戲笑亦未ニ之有。所行之處。爭申ニ供養ニ飲食衣服四事豐饒。皆不ニ自入。并將回施。好食送ニ大厨。供ニ養徒衆。唯食ニ糲惡。纔得レ支命。乳酪醞餈皆不ニ飲食。 (新修往生傳宋王古)

後者は前者の敷衍であらうけれども高祖行狀の聖蹟を彷彿せしめられるのである。之れに依りて考ふるも導師は徹底的なる道心堅固者にして終始絶大な大慈悲即ち佛心の體現に一段の努力を拂はれたる事を想像する事を得る。高祖は種々なる事情の元に無名な方であつたが眞の高徳聖者にてましませるが故に上求菩提下化衆生の大乗菩薩道の行者であると共に絶世の精力家であらせられた。否むしる奇蹟と考へられる位である。即ち

廣行ニ此化。寫ニ彌陀經。敷萬卷云々(續傳)
寫ニ彌陀經。十萬卷。畫ニ淨土變相。三百鋪所。見塔廟無レ不ニ修葺。 (瑞應傳)

時逢 玄冬之首。風飄ニ落葉。填ニ滿深坑。遂挈ニ瓶鉢。入レ中安座念佛不レ覺已度ニ數日。 (集成光明別傳、葵翁。)

と右の事實は儒者をして奮起覺醒せしむるに充分である。仰ぎ慕ひて己まざる所である。

高祖と傳記

高祖在世當時の社會狀態に於ては所謂正史に載せられるべき人師は地位名譽階級等の世俗的に高い上流階級のみでなければならぬ時勢なるを思ふ時に

「山僧善導……不知鄉貫……」

と云へるを見て高祖の出身の左したるものにあらずるを推定し得る。然るに當時にその名聲噴々たる道宣律師にして僅少な筆ではあるが「山僧善導云々」等の三十有餘文字中に高祖の全涯に於ける化導と人格の躍如として彷彿せしむるは當時隠れたる實踐佛教々家の權威として、その活動の華々しく幾多庶民人衆に取つて確かに導明燈として、實際宗教々化運動

に雄々しく抜くべからざる地步を有して居られた故に記者をして止めるに止まらざる筆法で史載せられたものであらう。高祖の全生涯に比して史傳に乏しく且つ詳細ならざるは千年の遺憾であり痛痕事であるが、是れ前述の理由によるも亦高祖自身光を秘し徳を隠して敢て世と交はられざるを以つて、人その行跡の詳細を知るものなく、遂に稀なる高僧をして精細なる傳記を後世に逸失せしめられたものであらう。

高祖の實踐道の出發思想

高祖幼少にして出死問題を探究せられ、解脱道に専任せられて求法の熱の熾烈なるご日常の行狀の超凡なるはその出發點は如何なる思想より超現せしや？高祖を導いて淨土教的安心立命に安住せしめた根元は何處にあつたか？元來高祖は廬山の白蓮社の第二世と稱せられたる方であるから慧遠法師の崇超なる感化を多分に受けられた事は勿論であるが、今此を縁としてその因を何處に求めたらよいか？自分は潜越かも知れないが、大經思想に負ふ所非常に多き事を信ずるものである。古來觀經は高祖とは、切る事

の出來ぬ因縁深きものであるが、三部の一なる大經も高祖の淨土教的安心救濟を生み出すに至大なる關係ある事を推定して過言でない事を信ずるものである。それは高祖の全生涯を注視すると首肯されるものであり、斯くある事を雄辯に物語るを見るのである。大經中「人在三世間愛欲之中一獨生獨死獨去獨來」云云の一切衆生は誰も自己獨りの觀念即ち

「如_レ是至_レ竟無_レ所_レ恃怙一獨來獨去無_レ二隨者一善惡禍惡追_レ命所_レ生」云々と

内在の魂は各自異なる道を辿る思想よりしき自己を除いて他の少しも頼るべきものゝない事を痛感せられた。此れ世と交る事の餘りない原因とも見られるのであつて此の觀念は佛陀の訓警中の一夫四婦物語にも見られるのであるが、又彼の智度論の警訓よりして、念佛の肝要を示されたる有名なる二河白道の物語は此の觀念を表現して餘蘊なきものと云つて然るべきもので人皆な自己の赤裸々觀に覺醒すべき貴重なる教訓である。生死の惡海を渡る吾々一切衆生即ち白道の行者は眞竊に他想なく進むのであつてそれは獨りにして修道の上に於ては信賴すべき誰人

も發見する事は出来ないのである。行くも死し止まるも死退くも亦死す。三定死の破目であるのが、凡夫の境遇である事を眞に徹底して體認する時初めて絶對の彌陀の大救済を泌々と感ずるのである。生死去我獨りなる思想を出發起點として高祖の人格は圓熟し他力増上縁の念佛教は首唱せられたのである高祖に對する影響の甚大なりし事は又引いて吾等淨土教徒の思想の多分を占めてゐる筈である。

高祖の深心釋

高祖の古今楷定の功は特筆すべき事であるが安心の内容なる深心釋は高祖獨創の見地にありて古今獨歩の意義あるものである。求道信仰の起點は信材にある。前述の獨在なる思想然も自己は罪障深重虛假充滿であつて所謂常沒常流轉の浮ぶ瀬なき徒者である宗祖も一枚起請文に

「一文不智の愚鈍の身になして尼入道の無智のともがらに同じうして」云々と而も注意すべき事は此の觀の輕重によりて彌陀救済の感應の稀濃を見るのである。普通一般人に取りては現在の自己觀に目覺むれば現在世に於ける救済されざる罪の子なる事を觀

想し、一步進みたる過去現在の三世に渡る自己罪惡觀に目覺めて來るが、此の人は非常に稀である。世人蕩々として想此に運ばず徒に暗黒無明界に去るを見る、實に悲しむべきである。敎家たる類にして又此の種の人々を見るに苦しまない。末法とは云へ憾むべき事かな。高祖は實に三世に渡る自己省察に強い鋭いメスを振はれて浮ぶ瀬なき自己の罪惡觀によりてこそ眞に彌陀の大慈悲誓願を有難く感涙と共に心底に味得され完全に彌陀救済の慈懷に抱かれたる心持に住して身を持つる事嚴に心神を制する事強く道を行ふ正に他に對する慈を以つて云爲なされる事が出來たものである。高祖こそは眞に彌陀に直參しその眞意に觸れたる最極の道人である。此の信機に徹底して彌陀の絶大不可思議無量なる本願に感得する事が出來、その實踐道として自然に稱名が相續されるのである。然も他力易行の法門なる故各階級材類を洩す事なく永劫不懷の所謂大衆的實踐佛敎であつて恐らく淨土敎的實踐道を除いては實踐佛敎の顯著なる全人的絶對救済の念佛敎を發見する事は出來ない。實踐佛敎の粹なる念佛敎は高祖によりて

後世に残るべき實教とはなれり。念佛教の絶對的深
心釋の特徴は信機信法と行き、此に強固なる大磐石
の金剛信を生ずる。此の金剛信こそ念佛行者の須要
なる安心である。通佛教に於ても

「信道源功德母」「佛法海以信爲能入」とす。況
や他力彌陀の願力に縋る淨土教に於てをや。信心即
ち深く信する心を除いては救済は成立しない。此の
深信こそ淨土教の生命であり能所化執れを問はず必
要缺くべからざるものである。高祖が如何に深き信
仰に燃わて居られたか到底我等凡夫の常慮では窺ひ
知る事は不可能である。併し傳記の語る所を通じて
その信仰内容の一端を窺ふとする。念佛鏡によるに
大師嘗て西京の寺内にありて金剛法師と念佛の勝劣
を論議せられたる事あり。その時大師は高座に登り
て諸經中一日七日一念十念すれば定人で往生する事
を得ると。此の宣言が不慮でなければ堂内の佛像は
總て光を放ち給へ。念佛の法が虚誕で往生淨土が不
可なれば高座よりして直ちに地獄に墜ちさせ給へ。
と斯様な誓を立て如意杖を以つて堂中の像を指示さ
るれば像は皆な光を放つたと書いてある。念佛往生

に對する金剛の如き信念が窺はれ唐高僧傳中に見
る決定不動の大信が良く此の邊を雄辯に物語つて居
るのである。斯の如き高祖の如來奉仕の行狀を眺め
内心に火よりも熱き信念を含藏され、其の信念の溢
然として他傳傳導所化に注がれたればこそ續傳に

「士女奉者其數無量」と云ひ熱烈に歸依渴仰求道
の結果投身自殺をも敢てなすものあり。その可否は
姑く置ても當時代の人心に異常なる感銘を與へ如何
に欣求淨土の思想の切々なりしかば、想像に苦しく
ないのであつて誰人も肯ずる事である。實際寺懷憚
法師碑銘に

時新修三昧善導闍梨慈樹森疎悲花照灼乃至寂化
無涯驅鐵圍於寶國云々

之を見ても如何に實踐的感化を高祖が本願念佛を以
つて一切衆生に施濟せられたか蓋し思ひ半に過ぎる
ものがある。實に民衆に取つて魂の血と肉とを易行
の實踐道である單信口稱の稱名の一行に結歸されて
餘蘊なきもの實に高祖の信念の然らしめしより外な
い。佛陀も遺教中に示して曰く

「弟子達よ念力堅牢なれば五欲の中に入るとも染せられず」
(法句經)

と實に高祖は雜闘繁忙なる長安都中に堂々他宗教と伍して念佛の大旗を揚靡し布教傳導に従事遊ばしたる當時を回想すると我等の胸中に轟動されるもの果して何であらうか？念佛の民衆化と民衆の念佛化をモットーとして雄々しく當時の學閥佛教に對して宗教窮極の道たる實踐運動に身堵奮然されて一新紀元を畫されたる法功は永劫不滅である。想此に到れば現代教界内に於ける信仰は一部を除いては餘りに心細し。前途に遙か想を連べば冷水に没する觀あり。

高祖と傳道

蔡翁の集成纂註に

「既自得證將輒利他不甚快乎。二利次第皆當如是自行未熟早涉利他者如下以未完不固之舟濟多人於惡海。自他俱溺。後學慎之哉」
「自得三昧以爲足者獨善人耳大師欲廣化而他而傳法」云々と

高祖は自利の完成者であるのみならず教人信に身命を投じて傳道教化され然も難中の難なるに係らず多

大の教跡を止められたるは、今更贅言を要しないから省略するが、高祖の傳道に對する態度は實に唯々敬服の外ないのであつて、蔡翁の讚辭の中にもある通り、末代敎家たる者の仰ぎ鑑み以つて服膺心すべき肝訓である。偏依善導の宗祖に次の法語があるが高祖の態度を讚仰されて仰せられたものと拜察する淨土宗の學者は此旨を知るべし有縁の人の爲めには身命財を捨て、偏へに淨土の法を説くべし自らの往生の爲めには諸翳塵を離れて専ら念佛すべし此の事の外全く別の營なし。(十六門記)

高祖の言へる

自ら信じ人を信せしむるは難中轉た更に難なり
大悲を傳へて普く化する眞に佛恩を報すとす
どの金言實に敎家の常境があらねばならない。

實踐佛教に於ける高祖の地位

最後に自分の論せんとするは實踐佛教に於ける高祖の地位である。支那佛教史上下を通じて出世せる名僧智者は枚擧に遑がない。立敎開家にあれ翻譯事業にあれ將又敎化事業にあれ、その犠牲的貴重な法蹟は未徒たる吾人の洵して以つて芳躅に鑑むべきであ

り、感恩の赤衷を捧げるべき事であるが、此に特に注意すべき事あり。世人在々にして人物を評するに重寶がられる人師と眞に重きをなす底の人物とを混同する事である。何時の時代如何なる場合にも世に重寶がられる人師は必ずしも事缺く事はないのである。然るに輝然として華々しき行蹟を青史に彩る人物必ずしも眞に重きをなした人師とは云ひ得ない。無名の人師にして然も重きをなせる人師こそ我等の切に求むべきもので、かゝる人師こそ滿腔の敬意を捧げて尙足らぬものであるが、遺憾乍ら曉天の星のそれより稀である。高祖は前者に屬するか？後者に屬するか？斷片的に亂雜に前述したるも所詮此を云はんとしたからである。此の意味に於て高祖の實踐佛教に於ける地位を論じやう。

支那佛教の黄金時代であつた高祖出世前後を瞥見するに十八賢で有名な慧遠法師は民衆教化と云ふよりは老莊思想より一身を清く保たん事を主眼とし、曇鸞法師道綽禪師の化見るべきものありしも一世を風靡するには到らなかつた。智者大師の天台宗も衰微し三論宗の嘉祥大師華嚴宗の賢首大師の法流則天武

後の代に隆盛を極めたが、學的信仰であつて、學僧の研尋せられた深奥な教理教儀に關しては民間信仰に何の刺戟をも與へなかつた事は明な事實である實踐佛教として禪宗の法脈あれども唯中流以上の社會には多少の感化があつたが、一般民衆には差したる影響はなかつた。高祖と同時代にして當時高祖と共に教界の二大明燈にして佛教史上冠絶せる一大偉人即ち玄三葬藏が在世してその盛名旭日のその如く道俗上下貴賤を問はず如何に禮敬せしかその入寂するや廢朝五日會葬百萬と稱せらる。人心の傾向歸仰一斑推して全貌を伺ふに足る。而してその主なる法功は蓋し經典翻譯事業と瑜伽法相の教義の宣敷であつて此等は勿論重要なものであるが宗教的教養に乏しく然も熾烈なる宗教的要求に對しては直接何等の交渉もなかつたやうである。然るに高祖は超然として民衆本位の傳道をなし念佛の民衆化を敢然とされたる功績は玄葬の功と共に史上双臂と稱せらるべきである。佛教の所詮は實踐の外なきにあれば民間信仰の鼓吹者としてその後世に於ける影響を考へて見ると實に高祖は支那佛教史を通じての第一者と斷

言して毫も過言でない事を信するものである。され

ば記者をして

佛法東漸以來如斯不_レ有_二監德_一云々

と歎せしの彌陀の應化と尊稱し宗祖も地垂跡説を立てて、十徳を擧げらる。實に宗祖大師によりて高祖の生命は吾等淨土教徒幾千萬否有情一切の教主であ

藻 鹽 草

三 宅 勇 誠

藻鹽草、古るめかしい聯想から同じ語呂の慣習に誰人も兼好法師を浮べ易いは免がれぬ處なるが旨趣のあわれに心し給へ

微妙歡樂の鳥の囀が響いて居る

自分は今山腹を歩いて居る。何んと言ふ自然美、小鳥は頻に囀り繼けて枝から枝へと飛ぶ。なに心無く頭を揚げた。そして思ひ切り空氣を吸ふて見た。冷たい様なじんめりした春の恵を一杯に孕んだ甘そう

る。

今や一千二百五十遠忌を迎へんとする此の時に當り教徒たるもの高祖の眞意の何邊にあるかを熟と再思三省し高祖の行跡を心慕し善導的精神を以つて社會淨化運動に臨むこそ慈恩高大な萬一に酬ゆるべく又不忘の責務なりと信す。

な空氣は胸一面に浸み渡つて居た。と言ふ一刹那に俺は殆んど近頃にも稀な突發的な、空想の一切れが幻影の眼に茫然として漂ふて居るのだつた。初夏の冷風が今一度自分の頬を撫る。香の善い、ひらごの花の辱しさうに搖れるのを見て其の妖艶な色彩に恍惚とされて居た。自分の空想は益々妄想にとそれから其へとかざわかされて展轉した。美音は又も響き渡る。それは一羽の名も知らぬ小鳥だ頻に身體を動